



とっておきの一枚！

坂口安吾『墮落論』（銀座出版社 1947 年）大田区立尾崎士郎記念館所蔵

終戦半年後に発表された表題作から、坂口安吾が戦後の代表作家となった。当館所蔵の署名本では、安吾から尾崎士郎宛が多く、二人の深い交友を窺わせる。



1954 年、57 歳頃の宇野千代（国会図書館「近代日本人の肖像」より）

◆尾崎士郎と宇野千代の馬込時代
小説家・尾崎士郎（一八九八～一九六四）の最初のパートナーで、馬込文士村の中心人物の一人が、小説家・宇野千代（一八九七～一九九六）です。「尾崎士郎と宇野千代」出会いから馬込転入に至るまで（大田区立尾崎士郎記念館版『記念館ノート 第4号』二〇二〇年）で紹介したように馬込転入に至るまでの二人の生活は浮き沈みが激しいものでした。一九二三（大正十二）年、千代が大手総合雑誌『中央公論』に次々と作品を発表して高い評価を受け、文筆家として暮らせるようになり、編集者として勤めていた士郎の収入と合わせて馬込に居を構え、翌年には士郎と正式に夫婦となりました。この頃、千代は執筆時に「一行書いては良人を振り返った。『ねえ、あなただっただら、ここんどこはどう書いて？』」（『模倣の天才』『新潮』一九三四年九月号）と士郎に甘えたように、仲睦まじい日々を過ごしていました。その後、人好きのする人柄から士郎と千代のもとに文士が集い、「馬込文士村」（榊山潤『馬込文士村』東都書房、一九七〇年）が形成されていきました。士郎と千代の馬込時代は五年程で終えますが、二人にとっては後の創作における基盤を築いた貴重な日々となりました。

大田区立尾崎士郎記念館版 記念館ノート

第9号

発行：2025 年 3 月 31 日
編集：大田区立籠子記念館

館のトピックス

2025 年度の予定

1. 馬込文士の足跡をたずねて散策会

山王草堂記念館など文化施設と連携して、馬込文士ゆかりの場所を散策します。

○「詩人たちの都・大森山王馬込～萩原朔太郎・室生犀星・三好達治を中心に～」(仮)

2026 年 3 月 28 日（土） 10:00 ～、14:00 ～

2. 2 館ギャラリートークのご案内

○以下の日程で山王草堂記念館と合同でギャラリートークを行います。

毎月第 1 土曜日（2026 年 1 月の回のみ第二土曜日）

各日 11:00 ～、13:00 ～ 2 館合わせて 1 時間ほど

開始時間まで山王草堂記念館にお集まり下さい。

※日程等は変更されることがあります。予めご了承ください。

館の基本情報

大田区立尾崎士郎記念館

〒143-0023 東京都大田区山王 1-36-26

TEL 03-3772-0680（籠子記念館内）

URL <https://www.ota-bunka.or.jp/ozaki/>

《アクセス》

① JR 大森駅より東急バス「上池上循環内回り」

「新代田駅前」行

② 都営浅草線馬込駅より東急バス「上池上循環外回り」

「大森操車場」行

いずれも「山王二丁目」下車、徒歩約 5 分

③ JR 大森駅西口より徒歩約 15 分

《入館案内》

●開館時間 9:00 ～ 16:30（入館は 16:00 まで）

※ギャラリートーク以外は外周からの見学

●入館料無料 ●休館日 年末年始、臨時休館

〈エッセイ〉尾崎士郎の再起に見る文士たちの交流〜川端康成と坂口安吾〜

大田区立尾崎士郎記念館 学芸員 黒崎 力弥

「人に好かれ過ぎるというのが唯一の欠点（宇野千代「酒屋の前は通れない」『私の文学的回想』中央公論社、一九七二年）と語られるほど小説家・尾崎士郎（一八九八〜一九六四）は、多くの文士から親しまれました。なかでも、小説家・川端康成（一九〇九〜一九七二）と小説家・坂口安吾（一九〇六〜一九五五）は士郎と深い交流があり、度々士郎を支えました。今回は、士郎が不振に陥った際、康成と安吾がいかに精神的に支えたかを紹介いたします。

尾崎士郎と川端康成の交流

一九二三（大正十二）年十月、士郎は「凶夢」を綜合雑誌『我觀』の創刊号に発表しました。発表時には注目されなかった「凶夢」でしたが、康成が「尾崎士郎氏の「凶夢」（我觀）は作者の心がいつぱいにみなぎっているだけでも、何と美しいことか。今月の力作である」（『創作月報』『時事新報』一九二三年十月二十六日付）と新聞紙上で称賛します。この頃、士郎は小説家・宇野千代（一八九七〜一九九六）とともに馬込転入を果たし、充実した日々を過ごしていたものの、小説家としては代表作を残していない不振の時期でした。『時事新報』をはじめ、『国民新聞』や『読売新聞』等の文芸批評で実績を残す康成が称賛したことをきっかけに、士郎は創作意欲を取り戻します。翌一九二四（大正十三）年三月、士郎が文京区本郷に住む康成の下宿まで訪ねて意気投合すると、生涯の交流が始まりました。そして、馬込界隈の生活を気に入っていた士郎が、康成に馬込転入を勧め、一九二八（昭和三年）五月、康成は馬込に転入しました。お祭り騒ぎをあまり好まなかった康成は尾崎家で開かれた文士の集いに参加することはなく、かわりに士郎が康成の家を訪ねて、交流を深めました。翌年一月、士郎は千代との生活に限界を感じて馬込の家を飛び出します。以後、士郎は住む場所を転々としましたが、一九三二（昭和七）年に大森源蔵ヶ原（現・山王一丁目界隈）に戻り、一九三五（昭和十）年三月に竹村書房から『人生劇場』を発表すると、再度康成がその作品を評価しました。

この一篇は尾崎氏が如何に立派に生きて来たか、人生を掴んでいるかを明らかにし、作家としての真価を心ゆくばかり発揮したというに止まらず、長編小説の問題、新聞小説の問題、純文学と通俗文学との問題、大人が読むに値する小説の問題、リアリズムとロマンチズムの問題、私小説の問題等にも、灯台となる名作である。（尾崎士郎氏の『人生劇場』『読売新聞』一九三五年四月十六日付）

そして、康成の称賛から『人生劇場』がベストセラーになり、以後、約三十年に渡って士郎は昭和を代表する小説家の一人として活動しました。また、康成との交流は士郎が世を去るまで続きました。士郎にとつて康成が別格の存在であったことが窺えます。

尾崎士郎と坂口安吾の交流

「坂口安吾が語る尾崎士郎との出会い」（大田区立尾崎士郎記念館版『記念館ノート 第8号』二〇二四年）で紹介したように士郎と安吾の交流は、安吾が世を去るまで続きました。一九三〇（昭和五）年五月から安吾は蒲田に暮らしており、蒲田近郊の大森に暮らす士郎と一九三五（昭和十）年に出会ってから交流が密になりました。この頃、士郎は代表作となる『人生劇場』で流行作家となり、竹村書房から初作品集『黒谷村』を出したばかりの安吾を弟分のように面倒を見る良好な関係がありました。しかし、一九三八（昭和十三年）年の秋頃、竹村書房が『人生劇場』を士郎の許可無しで再販したことで訴訟になりかけ、安吾が仲立ちしたものの、話が複雑化したことにより士郎と安吾は絶縁となりました。その後、一九四五（昭和二十）年八月十五日に終戦を迎え、士郎は日本の敗戦により失意に陥りました。そして、同年九月二十九日、疎開先の静岡県伊東から東京に戻り、大森駅から八景坂（現・山王二丁目三。駅から高台にある山王方面へ上る坂）を上って自宅へ向かう途中、士郎は安吾と再会しました。この時、安吾は士郎を励まそうと尾崎邸に立ち寄ったところ、士郎の不在で帰路の途中でした。後に士郎が「これは私にとつて一つの宿命」（芋月夜『謫居隨筆』酣燈社、一九四七年）とした再会です。

彼（安吾）が私（士郎）を訪れてきたほんとうの意味は眼先にはちらついている現象だけではない。もっと底ふかく永続的なものを含んでいることを認識したからである。（略）坂口が言った。「あなたはそれでいいとしても、我々には我々の為すべきことがある。あなたもまた軽々しく運命を甘受すべ

きではない」（芋月夜『謫居隨筆』酣燈社、一九四七年）

出会ってから十年の節目に、士郎は安吾と交流を再開しました。終戦後しばらくの間、士郎は執筆をやめていましたが、一九四七（昭和二十二年）年九月、士郎と安吾が中心となって雑誌『風報』を創刊し、士郎は小説家として再起の一步を踏み出したのです。

「人に好かれ過ぎる」士郎は、多くの文士から親しまれました。中でも、康成と安吾の精神的な支えは、執筆に関する再起となり、士郎にとつて二人との交流は、特別なものになったと思われま

主要参考文献

都築久義『尾崎士郎の生涯 実況人生劇場』白馬出版社、一九七二年
川端康成『作家の自伝十五 川端康成』日本図書センター、一九九四年
公益財団法人新潟市芸術文化振興財団『坂口安吾デジタルミュージアム』二〇一四年



1947年5月24日、同人雑誌『風報』の鼎談風景。右から安吾41歳、士郎49歳、編集同人となった小説家・尾崎一雄48歳（筑摩書房『坂口安吾全集17』1999年より）